

2サムエル記 17 章 23 節 「愚かな賢人」

アウトライン

1A 賢い人がする愚かさ

1B 先見性

2B 神の恵みの選び

2A 自殺という手段

1B 自分自身への限界

2B 神への叫び

1C 自分を捨てる

2C 神の恵みを信じる

本文

サムエル記第二 17 章 23 節を開いてください。今日の午後、16 章から 18 章までを学んでみたいと思いますが、今朝は 17 章 23 節に注目してみたいと思います。

アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

私たちの身近な問題になってしまった、自殺という話題です。これをタブー視する傾向を私たちは持っていますが、今や 16 分に一人が自分の命を絶つ、一年に 3 万人が自分の命を絶つという社会に私たちは生きています。身近な人で自殺したという人は私自身そうですが、皆さんもそうではないでしょうか？ 聖書というのは、決して人の有様をタブー視しません。生活のあらゆる領域において神のおられることを示す、聖なる書物です。

1A 賢い人がする愚かさ

アヒトフェルは、前回の学びから出てきた人物です。ダビデの議官でありました。今の言葉で言えば側近であり、顧問であります。指導者が一つの決断をする時に、どう思うかと聞くことのできる助言者であります。そしてダビデの親友でした。詩篇 55 篇でダビデは彼のことをこう言っています。「そうではなくて、おまえが。私の同輩、私の友、私の親友のおまえが。私たちは、いっしょに仲良く語り合い、神の家に群れといっしょに歩いて行ったのに。(13-14 節)」ところが、ダビデの息子アブシャロムが父に反抗して、ダビデから政権を奪い取る行動に出た時に、彼はアヒトフェルを自分のところに呼び寄せました(15:12)。彼はダビデを裏切ったのです。

1B 先見性

この裏切りをダビデが耳にした時に、彼はもちろんショックを受けたでしょう。けれどもこう祈りました。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。(15:31)」ダビデは、アヒトフェルの助言がいかに優れているかを知っていました。16章23節にこうあります。「当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。」したがって、彼の助言を愚かなものにしてください、と祈ったのです。

いわゆる非常に賢い人と、そうではない人の違いは何でしょうか？私はその先見性にあると思います。一般の人が見ているのが十メートル先だとすると、その人は一キロ先まで見ることできる能力を持っています。それはその人が特別な神からの託宣を受けたからではなく、人がどのような存在かを知り尽くしていて、どのようなことをすればどのような反応をするのかを見すえているからに他なりません。

聖徳太子の伝説で有名なのは、一度に十人の人が話しても、一言も漏らさずに聞き取った、という話がありますね。彼についての他の伝説では、「未来を予見した」というものです。「未来伝」という偽書がありますが、何百年も先のことまで彼の語ったことが日本の歴史の中で確認することができる、というものでした。けれども、それは予言ではなく、政治的な先見性があったから言えたのだ、という意見もある、と聞きました。これはあくまでも伝説的な話ですが、けれども、天才的な政治家は予言ではなく、予見としてずっと先のことまで見通せる能力があることは確かです。

アヒトフェルがそのような人でした。彼は、アブシャロムに、ダビデが残していった十人のそばめのところに入りなさいと助言しました。全イスラエルの目の前でそれを行ないなさいと助言しました。このことによって、息子アブシャロムが完全に王権をダビデから奪い取ったことを認めることができ、ダビデに歯向かう勇気を出すことでしよう、と言いました。そしてアヒトフェルは、ダビデとの戦いにおいて、ダビデがすでに疲れて恐れていること、そして全面戦争をするまでもなく、ダビデさえ殺せばイスラエルの民は穏やかになると助言しました。

ところが、ダビデがフシャイという友をエルサレムに送り込みました。フシャイは、アブシャロムにへつらいの言葉を言って、彼をおだてました。そしてアヒトフェルに対抗する助言を行ないました。全面戦争をしなさい、そしてあなたが先頭に立つのです、と。アヒトフェルはうぬぼれから、そのほうが良いとしました。

そして戦いの準備をしたのですが、アヒトフェルはアブシャロムが自分のほかりごとが採用されないのを知って、それで先に読みましたように自分の家を整理して、首をくくって死にました。それは、フシャイが提案した戦いにおいては必ずアブシャロム軍が倒れること、そしてアブシャロム自身も殺されること、そして自分自身も謀反の罪によって死ななければいけないと知っていました。

すでに戦う前から、こうした先々のことまで見えていたので、それでそれにふさわしい行動を取ったのです。そして彼は自分の家で残される者たちのことも前もって考えて、それで遺産分与など、遺言を残したのでしょう。そうして彼は首をくくって死にました。

2B 神の恵みの選び

しかしアヒトフェルは、これほどまでに賢い人だったのに、肝心のところで非常に愚かでした。それはもちろん、神によって油注がれたダビデを裏切るということです。確かに、ダビデが犯した罪があります。ウリヤの妻だったバテ・シェバは、アヒトフェルの孫娘です。彼女に対してダビデが行なったことに苦みを抱いていたのはほぼ確かでしょう。けれども、苦みが何も生み出さないことを彼は知りませんでした。

そして、ダビデは彼の正しい行ないではなく、神の恵みによってイスラエルの王とされた人であり、確かに彼は正しい生き方を、その大半で行なっていたのですが、だから彼が王であったのではないのです。神はダビデにこのように約束されていました。「しかし、わたしは、あなたの前からサウルを取り除いて、わたしの恵みをサウルから取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。(2サムエル 7:15-16)」彼から王座が取り去られることはなかったのです。「もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。(ローマ 11:6)」神の選びは恵みによるのです。

そして、ダビデのように罪は犯されませんでした、ダビデの子であられるキリストは、多くの人々を失望させるものでした。ユダヤ人がキリストについて期待しているように動かれませんでした。バプテスマのヨハネでさえ、イスラエルの民がイエスをキリストとして迎えて、イスラエルに刷新が起こると期待していたのに、何も起こっていないのを見て、この方が本当にキリストなのかと確かめなくなったように、です。そしてイエス様は、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は永遠のいのちを得るのです。」などと、言わなくても良いこと、人の心を引き離すようなことを言うものですから、多くの弟子が彼から離れたのでした。

イエス様は、「あなたがたも、わたしから離れますか？」と尋ねたら、ペテロは「あなたから離れて、どこに永遠のいのちがありますか。」と答えました。そうしたら、イエス様が、「**わたしがあなたがた十二人を選んだではありませんか。しかしそのひとりには悪魔です。(ヨハネ 6:70)**」と言われました。悪魔とはイスカリオテのユダのことです。イスカリオテのユダが、アヒトフェルと同じことをしました。彼はイエスの友であったはずなのに、裏切って、祭司長らにイエスを売り渡したのです。ユダは、アヒトフェルがダビデに失望したのと同じように、イエスに失望したのでしょう。けれども、イエスもまた神に選ばれた方だったのです。神に油注がれた者、メシヤであられたのです。だから愚かなことをしました。それでイスカリオテのユダもアヒトフェルと同じように、イエスを引き渡した後に自ら命を絶っています。

事実アヒトフェルは、イスカリオテのユダの型になっています。ダビデは、「私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。(41:9)」と詩篇で言いましたが、この言葉を引用してイエスがイスカリオテのユダのことを話しました。

アヒトフェルのように、自分の職分については極めて実直で、賢い行動を取っているのに、肝心の命についてのこと、神についてのことについて無知であることは多々あります。あるノーベル賞受賞者が、こんなことを言っていました。「私は積極的無宗教だ」と。宗教を信じないだけでなく、宗教をやめさせる、というのです。その理由はと言いますと、不思議な自然現象が起こった時に「神がなされたのだ」という安易な結論に走ってはならない。「わからないものはわからないにしておけ」ということだから、だそうです。これは科学者としては立派な姿勢です。

けれども、そのような目に見える自然現象については、最大限の注意を払い、何度も検証をし、それで理論にするという過程を踏んでいるのに、神についての事柄、死後についてのこと、また人生の意味については、同じような姿勢を貫かないのでしょうか？神については、「私はこう思う」と言って、何ら客観的な検証することなく、自ら欲するままの願望だけを述べています。もしそれが間違っていたら、という疑問は抱かないのでしょうか？多くの聖書のこの部分については理解できないからおかしい、と言うのですが、不思議な自然現象を目にする時に「そんな不思議なことは起こらない。」と決めつけるのでしょうか？

職分において立派な業績を果たしている人が、困った時になる時だけ「神頼み」になります。「いわしの頭も信心から」と言って、いわしの頭を神様だと信じることもできます。その一方で、歴史的に、また考古学的に重厚な証拠が残っているイエス・キリストの復活については、「それは信じがたいだ。神話だろう。」などと言うのです。けれども、まことの知恵は神ご自身に、そしてキリストのうちにあります。「主を恐れることは知識の初めである。(箴言 1:7)」「このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されているのです。(コロサイ 1:3)」

生活保障も同じでしょう。財テク、生命保険、その他あらゆるもので自分の生活を守ろうとする人の知恵にはすごいものがあります。それ自体を否定するのではないのですが、それもたかが数十年過ぎたら全て終わってしまうものです。「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。(マタイ 16:26)」なぜ、死んだ後の保証について詳しく調べようとしませんか？「死後の世界は存在しない」というのは決めつけです。それはあたかも、「私は中国へ行ったことがないから、中国は存在しない。」と言っているようなものです。だれもが間もなく死ぬのです。何十年もすれば、ある人は数年で、いやもしかしたら数か月で死ぬかもしれないのです。これだけ身近にある存在なのに、それを調べようとし、心に留めようとししないのは知恵があまりにもありません。

2A 自殺という手段

そしてアヒトフェルが自殺の手段を選んだことについて考えてみたいと思います。

1B 自分自身への限界

自殺をするのは、アヒトフェルのように人生に行き詰ったからです。大きな失望をした。自分に対する圧迫があまりにも大きい。他の人たちが自分を否定する。この問題に対する解決は全くないようだ、など。自分自身に対する限界にぶつかります。

2B 神への叫び

その時にこそ、自分自身を超えたところにある存在に叫び求めることができます。「私の心が衰え果てる時、私は地の果てから、あなたに呼ばわれます。どうか、私の及びがたいほど高い岩の上に、私を導いてください。(詩篇 61:2)」「呼ばわれます」とありますが、これは「神よ、助けてください。」という丁寧なものではありません、「助けてー！」という必死の叫びです。「及びがたいほど高い岩」というのが神であられ、キリストであられます。自分の限界をはるかに超えて救ってくださる方だ、ということです。

1C 自分を捨てる

けれども、多くの人が神に訴えるのではなく、他の手段に訴えます。つまり、自分を殺すという計画を立てます。そしてそれをするのできる手段を探します。そして実行するのです。実に残念なことですが、芥川龍之介や太宰治など近代文学の作家のほとんどは、聖書をよく読んでいました。それにも関わらず自殺を選びました。ちょうどアヒトフェルのように、あまりにも将来が見えずぎて、人間の現実が見えずぎて、頭が良かったのでかえってそれが自殺へと向かわせたのではないかと思います。

けれども、そのような危機の時に私たちは神を叫び求めることができるのです。なぜ叫び求められないのか？それは一つに「自分を捨てる」ことができないからでしょう。自殺というのは、本当の意味では自分を殺していません。自分の面子を保つために体を殺すのです。自分というものは生かしながら、いや自分を生かすために自殺をします。

神に叫び求めるには、本質的な死を自分に迎え入れる必要があります。自分がどうしようもない存在である、だからこれまでの自分のあり方をすべて捨てて、自分のいのちの源であられる神を求め、という決断です。これが聖書の定義する「謙遜」です。まことのへりくだりは、真の神の出会いからきます。預言者イザヤは、王座におられる主の幻を見て、こう叫びました。「ああ、私にわざわいが来る。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見ただけから。(イザヤ 6:5 別訳参照)」預言者ダニエルは、主の幻を見て、自分の尊厳が破壊され、力を失った、と言っています(ダニエル 10:8)。

2C 神の恵みを信じる

そしてもう一つは神の恵みを信じることです。自殺に至る人は、自分がしたこと、あるいは自分のあり方に対する報いのみを考えています。けれども恵みというのは、自分がしたことに関わらず、神が一方的に与えられる好意があることを教えます。本当は受けてはならない祝福を、キリストが行なわれたこと、十字架の上で自分の罪のために死んでくださったことを土台にして、豊かに受けることを意味します。もちろん、自分のしたことの結果はこの地上で刈り取るかもしれません。けれども、それをも補い、溢れ流れるような祝福が、かの世のみならずこの世においても神は約束してくださっているのです。

真の後悔をしたいですね。真の後悔とは、自分自身に対する後悔ではなく、神に対する後悔です。つまり、これまで神が自分に救いの手を差し伸べておられたのに、それを見向きもしなかったという後悔です。神に、「ごめんなさい、これまであなたに見向きもしませんでした。背いていました。」と謝ることで、自分から目を離して、神ご自身を見つめることです。最後に、コリント人への手紙第二 7 章 10 節をお読みします。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」